

# ROBERT LEPAGE 887

エディンバラ国際フェスティバル、パリ市立劇場などで上演され話題沸騰の新作、日本初演!



Photo by Erick Labbé

## ルパーージュ自ら語る少年時代の記憶と演劇について

オペラからシルク・ドゥ・ソレイユまで。独自の美意識とビジュアルセンスで世界を席巻する世界的演出家、ロベール・ルパーージュの本邦初演作は、自ら演じる衝撃の自分史だ。

### ルパーージュ・マジックとは

ロベール・ルパーージュは、コンパクトなひとり芝居から、10時間におよぶ超大作、オペラ、シルク・ドゥ・ソレイユにいたるまで、あらゆる規模とジャンルの舞台芸術を手がけて、世界中を驚嘆させ続けているアーティストだ。

たとえば昨秋日本でも上演されたリニューアル版『Needles and Opium 針とアヘン』は、ニューヨークに滞在中のフランスの詩人コクトーと、パリで恋人と別れたアメリカのトランペット奏者マイルス・デイヴィスという、同時代の2人の才人の胸中に、カナダのケベックからパリにやってきた俳優が、失恋を引きずるわが身を重ねるといふ作品。時代と場所が絶えず転換し、彼らの脳内も、ドラッグや妄想でつねにトリップする。ルパーージュは、キューブ型



昨年10月に世田谷パブリックシアターにて上演された、「Needles and Opium 針とアヘン～マイルス・デイヴィスとジャン・コクトーの幻影～」舞台写真

の装置を回転させ、プロジェクション(映像)を多用することで、壁を床へ、床を窓へ、パリをニューヨークへ、ホテルの一室を宇宙空間へ……と観客の眼前で次々に変幻させてゆく。観客はそのメタモルフォーゼ(変容)に目を奪われながら、コクトーとマイルスという天才の孤独を、等身大のケベックの俳優の傷みを通じて、リアルに体感することとなる。この不思議体験をもたらす独創的な仕掛けを、人は「ルパーージュ・マジック」と呼ぶ。

影絵やだまし絵のような子どもの遊び風の素朴な趣向でほっこりさせたり、最先端の映像技術を取り入れた、大掛かりな舞台機構を稼働させたりと、さまざまなタイプの視覚効果を駆使する「ルパーージュ・マジック」。言葉よりも視覚に訴えるこうした彼の表現スタイルの原点は、どこにあるのだろう。

ルパーージュの初来日は1993年。シェイクスピア三部作(『マクベス』『コリオレーナス』『テンペスト』)と、先述の『Needles and Opium 針とアヘン』の初演版を引っさげての登場だったが、その際の公演資料(パナソニック・グローブ座発行)に、こんな記述がある。ルパーージュがカナダの演劇学校在学中の16歳の時に、初めて舞台上立った際の感想を、自ら語ったものだ。

「僕はステージで、実は僕はシャイではなかったと気付いた。しゃべることがぎこちなければジェスチャーですればいいし、それで足りなかったら、まわりの空間や明かりや小道具を使えばいいと思った」

初舞台にして、この気づき。独自の舞台空間のとらえ方は、天性の資質によるものなのだとということが、よくわかる。ちなみにこの演劇学校時代、ルパーージュは日本の伝統演劇を専門に学んでいたそうで、初めて日本を訪れた際は、2週間、毎日昼夜歌舞伎座に通いつめたという逸話も残っている。ビジュアルにこだわり、身体表現に重点を置き、見物を喜ばせるエンターテインメ

ントに徹する歌舞伎の精神と技術が、ルパーージュのクリエイティビティに多大な影響を与えていることは間違いない。

さらに、こうした志向の大前提にあると考えられるのが、彼が生まれ育った社会環境だ。ルパーージュは、カナダのケベック州ケベック・シティーの出身。圧倒的な英米語圏である北アメリカで暮らす、少数派のフレンチ・カナディアンだ。英語とフランス語がともに公用語で、英仏併記が法律で定められている国とはいえ、四方を英米語圏に包囲される中で、フランス語とその文化を貫くのが、ケベック人魂。周囲との言葉の壁は少なからず存在し、特に、通常は言葉の比重が大きい演劇活動を行うにあたっては、フランス語に依存していると、国内でも一部の観客にしか伝わらないという事態を招いてしまう。そこで必然的に、せりふよりもドラマの内部にフォーカスし、言葉以外の方法で内容を表現するスタイル「ルパーージュ・マジック」が育まれていった。'95年に広島を舞台にした大作『HIROSHIMA—太田川七つの流れ』で来日した際のインタビューで、ルパーージュ自身がそう明言していた。ケベックとルパーージュ。作品にも必ずといっていいほど「ケベック人」を登場させるルパーージュにとって、それは自分の分身以上の、重要な意味を内包する存在らしい。

### ケベックとルパーージュ

そのことに敢えて焦点を当てたのが、昨年世界初演されたばかりのひとり芝居『887』だ。タイトルの数字は、ルパーージュが子供時代に家族と住んでいたケベック・シティーの番地、887 Murray Avenueのこと。ある詩の会での朗唱の依頼を受けた現在のルパーージュ(本人)が、詩を暗唱するために、言葉を自分の好きな場所に当てはめて覚える、という記憶術を試みる。そこで久しぶりに思い出したのが、裕福とは言えなかった子供時代のアパート生活のこと。タクシー運転手の父と、母や兄弟との狭い部屋での日々、認知症になった祖母を、引き取るか否かの問題が浮上して……という非常にパーソナ

6月23日(木)~26日(日) プレイハウス(英語上演・日本語字幕付)  
作・演出・美術・出演:ロベール・ルパーージュ

ルな家族の記憶と、'60~'70年代にケベックを覆っていた英語圏の住民によるフランス語圏の住民支配や差別と、フランス語圏住民による主権奪還の激しい闘争の歴史、といった社会情勢が、折り重なるように描かれてゆく。

887 Murray Avenueという場所について語りながらルパーージュが舞台に持ち出すのは、3メートルほどの高さがあるビルの模型。彼が家族と住んでいたアパートを正確な縮尺で再現したかのような形態のもので、よく見ると、ミニチュアの各戸のベランダ越しに、奥で暮らす人々の様子が、妙にリアルな映像で映し出されている。例によって、最新鋭のプロジェクション・マッピング技術を取り入れたルパーージュ・マジックの始まりだ。そうかと思うと、内視鏡カメラをビル模型の中に入れ、ドールハウスのように小さな家具が設けられた部屋をのぞき見し、プラスチックの人形や、シンプルな影絵で家族を表したりする、素朴な手作り感も健在だ。

ミクロと等身大、家庭と社会、過去と現在を自在に往き来しながら記憶をたどり、家族と交わした会話から自身のセクシュアリティのありように至るまで、これ以上ないほど、赤裸々な自分史を開陳してしまうルパーージュ。もちろん、語られるすべてを事実と思ひこむのは、観る側の勝手ではある。が、幼少時のさまざまな経験と、生まれ育ったケベックが背負ってきた理不尽な屈辱の歴史。それがこの天才アーティストのバックボーンにあるという事実を、客観的な事象を並べつつ、直球で突きつけてくる姿勢に、胸を打たれずにはいられない。来年で60歳になるこの天才アーティストが、なぜ今、ここまで来し方を振り返るのが。年齢と記憶。記憶と演劇。演劇と家族。家族と国家。その胸に去来するものを想像すると、熱いものがこみ上げてくる。

ルパーージュ・マジックにより、これまでひとり芝居だけでも、いくつものユニークな作品が創作され、その多くが日本でも上演されてきたけれど、多忙を極めるルパーージュ本人が日本の舞台上立つのは、なんと10年ぶりのことになる。それだけ作者にとっても特別な意味を伴う新作。見損なったら、きっと後悔する。

文:伊達なつめ(演劇ジャーナリスト)

芸劇chにてスポット映像公開中!  
(<http://www.geigeki.jp/ch/ch1/t120.html>)

4月16日(土)発売